

# 「楽園」を撮る

三好 和義

みよし かずよし／大学卒業後、株式会社「楽園」設立。タヒチ、モルディブ、サハラ、ヒマラヤ、南極など世界各地で「楽園」をテーマに撮影を続け写真展を多数開催。写真集「RAKUEN」で木村伊兵衛賞を受賞。作品はジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館に永久保存。国際交流基金買上げの作品「日本の世界遺産」は世界各地の写真展で紹介。2004年藤本四八写真文化賞を受賞。四国八十八カ所の作品は切手化されている。

僕は今までに六〇カ国以上を訪れ楽園をテーマに写真を撮ってきましたが、そのきっかけは大阪万博です。小学六年生の夏休み、大阪の親戚の家に泊まって二週間以上、毎日朝早くから最終まで通って全パビリオンで写真を撮りました。万博で世界各地の自然や文化に惹かれ、カメラマンになれば世界を回れると考えたのです。

その後、東海大学在学中に練習船で南太平洋を回ったとき、ポナペ島で見た踊りに沖縄文化とのつながりを感じたりして南国が好きになり、在学中から楽園というタイトルで作品を発表してきました。僕にとつての楽園は南国から始まったのです。しかし

今では、世界中で楽園を探しています。聖地、極楽浄土、桃源郷などと言い換えられるでしょうが、要するに僕が興味のあるところが楽園なのです。

最初は風景の美しいところが楽園と思っていましたが、ハワイのビショップ博物館を訪れたときに、ポリネシアへの人の拡散史やフラに興味をもち、精神的な世界も楽園の条件と考えるようになりまし

た。ポリネシアの人びとの文化のつながりを見るにつけ、彼らがカヌーで太平洋に乗り出したのも、楽園を求めたためだろうかと考えたりします。

もあり、四国八十八カ所の写真も撮ってきました。空海にとつての理想世界、楽園を知りたいからです。中国やチベットのお寺や遺跡を訪れているのも、僕のなかでは空海つながりです。

こうした精神世界を撮るのに、写真技術の進歩が寄与しています。フィルムだと現像までに時間がかかり気持ちが冷めてしまいが、デジカメだとその場で確認できる。この即時性は精神的な世界を撮るのに不可欠です。ハワイでもフラを撮って、あ、これだと思つて自分の気持ちがどんどん高まり、踊り手と自分が一体になれる、参加しているという実感も

ちながら撮影できました。フィルムやメモリーの感度が高まったことも、写真が精神的なものに追いついてきた理由です。一五年前のこと、新月の夜に、ここだと思つて方角に向けて三時間ほどシャッターを開放し、星明かりだけで富士山が写った経験があります。人には見えないものが写る、これは衝撃でした。デジタルだともっと優れていて、松明の光だけでおこなう伊勢神宮のお祭りでも、神饌の伊勢エビと昆布が写りました。まさにスピリチュアルなものが写ると感じました。こういう世界に迫っていける写真技術の進歩に、僕は大きな期待をもっています。



目次  
DECEMBER 2008 12  
月刊みんぱく

- 01 エッセイ 世界へ世界から  
「楽園」を撮る  
三好 和義
- 02 特集 手塚治虫の遺したもの  
手塚マンガの世界に見る  
異文化接触と相対化の視点  
久保 正敏  
ストーリー・マンガの革新性  
竹内 オサム  
マンガ産業の広がりと「鉄腕アトム」  
中野 晴行  
「リボンの騎士」以前・以後  
藤本 由香里

- 科学・SFマンガと手塚治虫  
村上 知彦
- 08 モノ・グラフィ  
みんなで持ち寄った「おかね」の展示  
近藤 雅樹
- 10 地球ミュージアム紀行  
ヨルダンで博物館をつくる  
森田 恒之
- 11 表紙モノ語り  
鳳凰  
慥永 真佐夫
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 万国津々浦々  
子連れフィールド・ワーカー奮闘記 ルーマニア篇  
トランシルヴァニアで息子と暮らす  
大塚 奈美
- 15 人生は決まり文句で  
アイヌ アナクネ ピリカ  
佐々木 利和

- 16 外国人として生きる  
ふたつのことばで落語がもっている  
笑いのパワー全開！  
藤井 幸之助
- 18 歳時世相篇  
◎12月の犠牲祭  
動物たちの受難  
新免 光比呂
- 20 生きもの博物誌  
武器になった生き物  
山中 由里子
- 22 フィールドで考える  
呪術から見る民族関係  
一東マレーシアの華人と先住民  
市川 哲
- 24 みんぱく ウィークエンド・サロン  
研究者と話そう  
次号予告・編集後記